

『ビッグ・イシュー』を購入する 学生たちと私の講義

——『ビッグ・イシュー』と学生たち（I）——

池 野 重 男

1. は じ め に

私は、演習や保険論の講義のなかで雑誌『ビッグ・イシュー』——「ホームレスの仕事をつくり自立を応援する」雑誌で、ホームレスが販売員となって路上で二百円で売り百十円が収入となる——を紹介したり、テキストにしてきた。そして、学生たちに販売員から買う時にできるだけ会話をし、それをレポートするように求めた。本稿は、そうした学生たちのレポートを具体的に示しながら、学生たちの問題意識・関心、教育のありようを考えることを課題とする。

私が学生たちに販売員と会話をするように求めたのは、次のような教育実践に関わる。まず第一に、販売員がホームレスであるという一事でもって学生たちは腰を引いてしまひなかなかに買おうとしなかったから、私があと一押しする必要があった。もっとも、学生たちのこうした腰が引けた状況は大人の姿の反映でもある。大宮知信『「金の卵」転職流浪記』（ポプラ社 05年）は、路上生活者の取材のために一緒に寝起きしていた時に「そばを通りかかったサラリーマン風の中年男が一瞬立ち止まって、傲慢な視線を俺のほうに向ける。その目は『あいつよりはまだまだだ』と言っている」（p. 163）と感じている。

第二に、レポート提出という“強制”——教員の権力性という根源的な問題については今は措く——で余儀なくされてという形ではあるが、自分から販売員に話しかけることによって抽象的で他人事的なホームレス一般としてではなく具体的な顔を持った・ひとりの人間として販売員と接することができ、それによって自分の偏見に正面から向かい合えることができると考えたからである。

なお、若い——若くはない社会人学生たちもいるが——学生たちの多くの具体的な^{レポート}声^レが『ビッグ・イシュー』発行元と販売員たちへの応援になればと思い、学生たちの購入レポートを小冊子にして発行元に送り、その時に「私の講義で『ビッグ・イシュー』について話してもらえないでしょうか？」とお願いした。だから後に講演の時に、『ビッグ・イシュー』日本代表の佐野章二さんは、「感想をドサッと送られて、これは喧嘩を売られたのと同じだから受けざるをえなかった」と冗談を交えておっしゃっていたが、とにかく快諾いただき、〇五年六月二八日の私の講義とゼミの時間に講演会が実現した。これを、別稿『『ビッグ・イシュー』日本代表佐野章二氏講演と学生たち——『ビッグ・イシュー』

と学生たち（Ⅱ）——」として予定している。

2. 私の講義と『ビッグ・イシュー』

まず、私の講義でなぜ雑誌『ビッグ・イシュー』を取り上げるのか？ について。

私の保険論の講義では、どんな保険商品が発売されており、それらがどのような内容なのかといった知識・情報の伝授を一切しない。そうではなく、保険商品が数多く発売されているのは、現代社会で人と人との関係が切断され、カネを媒介にしてしまっていることの反映であり、だから、人と人との関係をどう取り返すかが生きる＝働くことのポイントになる、と説く。つまり、具体的な人間関係を失ってカネでしか媒介できなくなっている現代社会のありようをテーマとする私の講義の具体的な試みとして、「ホームレスの仕事をつくり自立を応援する」雑誌『ビッグ・イシュー』を取り上げるのである。予定している別稿「『ビッグ・イシュー』日本代表佐野章二氏講演と学生たち」で佐野氏が語るように、『ビッグ・イシュー』は直接の目的であるホームレス応援だけではなく、そのなかで人と人との触れ合い・励まし合いをもたらしている。

なお、現代社会におけるホームレスの位置づけについて、渡辺治「グローバル化・『強い国家』政策と現代警察のねらい」（小倉利丸編『グローバル化と監視警察国家への抵抗』樹花舎 05年）は、次のように整理している――

財界や大企業が、自らの生き残りをかけて構造改革に熱中していたが、企業リストラや構造改革は、日本社会の既存の統合と安定に大打撃を与え、解体の危機をもたらしていた。それが九〇年代の後半になって、突如顕在化したのである。……

その一つがホームレス問題であった。……

ホームレスの構成を見ると、五〇代から六〇代の男性が圧倒的に多い。これは後述する自殺者にも共通している。しかもホームレスの出身をみると、もともとは正規雇用者や安定就労者が多く、それが解雇、失業、倒産などにより不安定就労層となり、そうした不安定就労の途絶や縮小によりホームレスになっているケースが多い。

こうしたホームレスの増加傾向や構成をみると、その九〇年代における著増の原因は……ひとつは……グローバリゼーションと企業のリストラである。グローバリゼーションによる産業空洞化で中小零細企業や地場産業の倒産が増加し、また都市自営業や農業の破綻が起こっている。企業の海外移転とリストラによる中高年と青年層の失業率が増大し、また広汎な非正規雇用者が滞留する。それが社会の底辺層の蓄積……家族の崩壊や離婚率の急上昇、そしてホームレス問題の社会的「温床」となっているのである。

それに加えて……社会保障の諸制度が構造改革によって壊され、縮小させられたことである。……雇用保険の絞り込み、生活保護需給の「適正化」による絞り込み……構造改革による公的住宅建設の縮小や公営住宅の廃止など……

また、九八年以来今日まで毎年日本で三万人もの自殺者が続く事態を、「中高年の男性

が日本で生きていくことは、それほど苦勞が多いことなのか？ あるいは、こう言い換えることもできるだろう。日本という国は、辛苦を耐えてまで生きる価値のない社会に変化してしまったのかもしれない」と読む、岩波明「人生からのリストラ」(『世界』05年9月号)は、次のように言う――

奇妙なことだが日本においては、実効のある自殺防止の取り組みがこれまでほとんどみられていない。むしろ、自殺を助長する傾向さえある。自殺者たちは黙殺され、見捨てられ、見殺しにされているのだ。自殺とは、人生からのリストラである。会社でのリストラが安易になされているように、人生のリストラに関しても日本の社会は冷淡である。会社から、あるいは人生からリストラされた人、またはされようとしている人は、多数からはみ出した者である。彼らに対しては、冷淡に振る舞ってもかまわない、リストラされるくらいだから何か落ち度があったに違いない。「安全な立場にいる」日本人の多くはそう考えるわけである。……集団となった日本人は、はじき出された者をゴミのように扱う。……

このように多発する自殺者の背景には、日本型の統制社会、監視社会の存在がある。個人が突出することを嫌い、周囲の人々の生活や心情の個人的部分までチェックしないと安心できないという風潮は根強く残っている。この風潮は突出した行動をとる者や世間に「迷惑をかけた」者への「悪人情」につながる。

失業者に対する視線もこれに似たものがある。職を失った男性は、失業したというだけで、周囲からも家族からも、白い眼を向けられる存在となる。失業すること自体が、社会の規範からはずれた「よくない事」なのだ。人間としての価値もゼロどころか、マイナスとなる。彼はいてはならない存在となる。(傍点――池野 以下同じ)

ホームレスが「白い眼を向けられる存在となる」ことは、今ではもはや明白である。だとすると、『安定した雇用』『安定した生活』が簡単に得られないものとなった今、豊かな生活への幻想を捨てるだけでなく、『悪人情』をやめ、個性や自由を認める社会に日本を変えていくことが求められている」と、岩波氏は結論する。この方向こそ、私が学生たちに販売員と会話をして『ビッグ・イシュー』を買うことを勧めるところと繋がる。

3. 興味・関心の問題

ところで、『ビッグ・イシュー』を買おうとしない学生たちが多かった。

たとえば、「ビッグイシューは、自分は神戸に住んでいるので、元町で何回か見かけた程度で、あまり気にとめたことはありません。存在自体は知っていたのですが、未熟なので買ったことはありません」(四回生)という学生は、「未熟なので」買わない――意味不明だが――と宣言する。

また、「今回でこの本を買うのは3回目だが、毎回同じ人から買っているような気がする。僕は、大阪駅から阪急に渡る横断歩道の所で3回とも買っている。いつも僕が和歌山

から電車で大学に行く時にそこを通るのは5時くらいで、2人が本を売っている。しかし、買っている人を見るのは全くない。そして、大学の帰りに本を見ていると、周りの人はのぞき見してくる。ほとんどが写真なので、僕は様々なことを想像する。本当にえぐいシーンは何枚もあるし、世界でこのような悲惨な出来事が起きていると考えれば、僕は本当に恵まれた環境にいてることをつくづく思われる。すべての本にブッシュとイラクのことが載っていて、アフリカ難民の写真も全てに載っている。これからこの本を買おうと思った」(四回生)と書いてきた学生は、『DAYS JAPAN』という写真雑誌と勘違いしている。レポートの後半(「ほとんどが写真なので〜」)はビッグイシューのことではなく、完全に『DAYS JAPAN』の内容である。ゼミの教材としてそれを学生たちに配布したことがあるから、当時はゼミに所属していた同君は勘違いしたのだろう。となると、レポートの前半の『ビッグ・イシュー』の購入記についても不信を抱いてしまう。

さらに、買わないという選択をしていながら、じつはそのことを全く自覚していない学生たちが多い——「4月25日の夜中の2時にホームレスの人たちが『ビッグ・イシュー』の雑誌を売っている活動の様子などがテレビで放映されていました。先生が授業中に言っていた事がテレビでやっていた。実際に道を歩いていて、雑誌を売っているのを見かけたら買ってみようかなと思いました」(二回生)、「初回の授業から池野先生が勧めているビッグ・イシューですが、なかなか販売員がいる地区に出掛ける機会がないのでまだ読んでいないのですが、先日、テレビでビッグ・イシューが紹介されていた。その番組で初めて知ったのですが、ホームレスと呼ばれている人たちの約四割は共同でアパートなどを借りて住んでいて、路上生活をしていないということで驚きました。雑誌の内容は池野先生が紹介していた通り若者向けの内容らしいので、今度、販売員を見かけたら購入してみようと思います」(三回生)、「先週の講義でビッグ・イシューの話を聞いて僕自身も町で何度か売られているのを見たことがありましたが、それを手にして売っているのがホームレスの人だからという理由から通行人の視線を無意識にか気にして、その雑誌がいったいどういうものなのか気にはなっていたのですが確かめることはせずにそのまま素通りしていました。ビッグ・イシューの売り上げが減少しているということで出版社側のほうも色々試行錯誤されているということでしたが、内容云々の前に僕のような内容を知りたいけども躊躇してしまうという人が増えてきているというのも理由なのではないでしょうか? まだあれから梅田に出る機会がなかったなので、購入していませんが、次に見かけた時は、これをきっかけに購入しようかなと思います」(三回生)、「一度、拝見してみたいとは思っていますが、買いに行く機会がありません」(三回生)、「ビッグ・イシューは梅田に寄る機会があれば買おうと思います」(二回生)、「あまり梅田駅方面には行きませんが、行く機会があれば、買ってみようと思いました」(二回生)、などなど。

つまり、機会がないので買っていない=ついですがあるまで買いませんというのは、直接的に言えば、自分の興味・関心のないことには時間とかカネといったエネルギーを使う気がしないと断言しているのである。それでいて、単位取得には強くこだわる。そして、その矛盾に頓着しない。逆に、講義には出席しているのだから単位はもらって当然という姿

勢さえ示す。これについて詳細は、私の「書評：吉岡忍『ある漂流者のはなし』」（本誌本号）に譲るが、私はレポートを返す時に、機会は自分で作るものだよ、「買う機会がないから買えない」というのは「買うつもりがない」と言っていることなのだよ、と自覚してもらうようにしている。

4. 動き出す学生たち

一方で、確実に私の誘いに乗ってくれる学生たちがいる――，

ホームレスの方が売っているのですから、買うのにはその方に声をかけなければいけないわけですが、それには少し勇気がいるなあと思いました。なぜなら、私はコンビニで働いているのですが、そこにはたまにホームレスだと思われる方が買い物に来るのです。一度に大量買いしていくのですが、レジに来る前からとてもキツイ臭いがしているのです。仕方がないとは分かっているのですが、そういった経験から自分から近づくには勇気がいるなあと思いました。世間の人は私を含めそういったホームレスとしか接触がないから余計にホームレスとの距離が空いてしまうのかなと思いました。そこでもし本を売っているという小綺麗なホームレスと出会えばその固定観念は薄くなり、ボランティアなどの助け合おうという気持ちが芽生え、支援が大きくなるのではないかと思います。最近ではどんな風にして売っているのか気になりますので、繁華街に出掛けた時には横目で探そうになりました。見つけたら一度声をかけて買ってみようかと思いました。（二回生）

毎日、梅田でビッグイシューを売っているホームレスを見るが、いつも買おうと思っても、いざ前を通ると、立ち止まって買おうとまでは思えず、いつも買えずにいます。あしたこそは買ってみようと思います。（三回生）

まだまだ偏見に囚われて動けない学生たちが一歩踏み出して、『ビッグ・イシュー』の購入へと至る――，

僕がビッグイシューを購入した場所は阪急梅田駅とJR大阪駅の間にある歩道橋の下に立っている人からでした。それまでに違う所で二度ビッグイシューを買おうと思いましたが、そこには販売員の人は立っていませんでした。一度目はホームページで調べ、難波の高島屋周辺に売っていると書かれてありましたが、お昼なのに販売員はいませんでした。二度目は友達に扇町駅周辺で買ったという話を聞き、行きましたが、時間帯が夕方だったためか、販売員の人はいませんでした。やはり梅田に行くしかないと思い、三度目にしようやく買うことができました。その時は販売員の人は何も喋れませんでした。やはり「ありがとうございます」という言葉が印象に残っています。そして、二度目の時に話を振ってみました。「売っていますか」と聞くと、販売員の人は、「ボチ

ボチですね～。やはり出始めと終わりではかなり違ってきますね」と答えてくれました。
(三回生)

私が買ったのは、26号でした。買った日は4月23日の早朝でした。この日は一限〔9:00～10:30〕から授業があったので、通学途中に友人と梅田で買いました。一人だったらなかなか勇気が要ったと思います。朝だったのでけっこう人も多く、電車の時間もあったので、やりとりは必要最小限のものになってしまったかと思いますが、今まで気にはなっていたけれども購入することが出来なかった物なので、「やっと買った」という気持ちになった。
(三回生)

自分は、梅田スカイビルに行くまでの地下道の所で2回ビッグイシューを買いましたが、1回目買う時は正直ドキドキしたし、周りの視線なんかも気になった。なんでなんかは分らんけど、すごい短い時間の中で、すごいいい経験になったと思う。

会話らしい会話はなかったし、普通のやりとりだった。「一つください」「ありがとうございます」みたいな感じで。そして講義でいろいろ話を聞いているうちに、また買いたくなった。表紙に好きな「ブルースウィルス」の時だ。2回目は、覚えていてくれたのか、「ああどうも」みたいな感じでやりとりをして、「授業でけっこう使うんですよ」みたいな会話をして、向こうの人も「そうですか」と普通に話した。
(四回生)

J R大阪駅と阪急梅田駅との間の階段の下でビッグ・イシューを売っている方と話をしに行くのに、正直、少しドキドキしました。そこは通行人がすごく多い場所なので、僕が話をしているとジロジロと見られ、やはりみんな差別的な考えがあるのかな？ と思ってしまった。その中で、僕も一声かけたら普通になって、毎日同じ場所で二人で交代しながら一日中そこにいることを聞いた。そして、何が一番嬉しいかという、やはり売れることが嬉しいとおっしゃっていましたが、一声かけられるのも元気付けられて嬉しいとおっしゃっていました。問題は場所で、夏でも冬でも冷暖房の効いた中で働くことができないのが辛そうで、人通りが多いというのは良いことですが、体のことも考えると、もっと場所を提供してくれるような人が現れたらいいのに、と感じました。ちなみに、その場所は新刊が出た時は100部くらい出るそうです。
(四回生)

ビッグイシューを金曜日に大学が終わってから買いに行った。友達と二人で買いに行ったが、話しかけるのにやはり抵抗があって、かなり恥ずかしかった。
(三回生)

いつも路上に立って、雑誌を売っている販売員の方を見る。新聞やテレビなどで特集で取り上げられていたため、雑誌があることは分かっていた。値段も安いし、好奇心もあった。しかし、買う機会がなかった、というか、買えなかった。ビッグ・イシューの販売員の方は、ホームレスか自分の住まいを持たない人だ。何かは分からないが、自分

の中に彼らに対する偏見があったのだと思う。ホームレスの方たちの何が悪いって聞かれれば私は答えられないだろう。しかし、何か抵抗があった。それから1年半が過ぎ、大学でゼミを取るようになって、ビッグ・イシューが教科書になったため、買わざるを得なくなった。実際買ってみると簡単だった。そんなに何を悩んでいたのか、と思う。街を通るなか、暑い日でも声を張り上げて雑誌を売ろうと頑張っている人が多く、必死なのだろうなと思った。それでも、雑誌を買う私たちにお礼の言葉を忘れない。そんなの当たり前だと言われてしまえばそれで終わってしまうのだが、意外と商売されている人というのはこれができていなかったり、態度が大きかったりする。私がいつも買う三宮のダイエー前のおじさんは、いつも通勤時に見かける。朝早くから晩まで、長い時間立ちっぱなしで大変だなと思う。(三回生)

僕がビッグイシューの存在を知ったのは高校生の時である。友人と梅田を歩いた時、ホームレスの人が売っている本があると聞いた。知らないことながらに興味は持っていたが、失礼なところ正直買って読むことはないだろうと思っていた。高架下で売られているマンガ雑誌のような物だろうと、無礼な勘違いをしていた。ゼミで使うと聞いた時には、梅田で立ち売りをしている人の姿がすぐに思い出せた。どんな物かも分からない本を、ゼミで使うからという理由で買うのも不思議な気分だった。一冊下さいと声をかけると、思いもよらない元気な、「ありがとうございます」が返ってきた。驚いた。何より、元気なお礼の言葉に対して驚いている自分に驚いた。気分のいい、ありがとうございますが聞けたことに驚いた。それは、聞けないだろうと思っていたからである。こんなに失礼なことはない。自分を恥じた。その後、二冊、三冊と買ったが、やっぱり「ありがとうございます」が聞けた。僕の方が元気になる気がした。(二回生)

私がビッグ・イシューの存在を知ったのは、高校時代のいつかは定かではないのですが、ニュース番組の特集でした。その時はさほど気に留めることもなく、育った地域性（都会ではない）からかもしれませんが、ホームレスの方をあまり目撃したことがなかったのも、まったく別世界の話のように思っていました。その後、この大学の入試の時に、地下鉄の西中島南方駅で初めてビッグ・イシューを売っておられる方と遭遇し、その時にいったんは購入しようと思ったのですが、何か近寄りがたく、購入を断念した。そして今回、授業の一環ということで初めてビッグ・イシューを購入してみて、なにか暖かい気持ちになった。最初は、ヨドバシカメラのJR側の歩道橋の下で購入しました。60歳前後の男性だったように思います。ごく普通の人という感じで、「一冊下さい」と言うと、「ありがとうございます」と本当に嬉しそうに言ってくださったことが、とても印象的でした。その後、一言だけの会話でしたが、「売れますか」の私の問いかけに、「ぼちぼちです」と答えてくださいました。その時はそれだけで終わりました。次は、阪急のHEPの辺りでした。その時にも購入したいと告げると「ありがとうございます」と満面の笑みで答えてもらい、私自身とても心が暖かくなりました。(二回生)

私はＪＲ線と阪急線を利用し、大学に通っています。なので、ＪＲ大阪駅から阪急に行くまでに歩道橋のようなものがあり、その歩道橋の上る前にいつも立っている人がいました。その人がビッグ・イシューの販売員の方たちです。最初は、何の雑誌？ 本？ を売っているのか疑問でした。購入する人は若い人だったり、サラリーマン、ＯＬ、中高年、男女と幅広い年齢層の方々が購入していたこともあり、疑問だったのですが、特に興味もなく毎日通り過ぎていました。ところが、ゼミでビッグ・イシューが必要と聞き、買いに行きました。

私「すみませーん、ビッグ・イシュー24号　くださーい！」

販売員「はい、ありがとうございます！　200円頂戴します」

私「はい、200円ですね！　学校で先生に授業で使用するために買いに行きなさいと言われて買いに来たんですよ～！（笑）」

販売員「あ～、そうなんですか～！！」

私「あっ、はい、200円」

販売員「あっ！　はい！　ありがとうございます。」

私「いつも立ちっぱなしでしんどいんじゃないですか？」

販売員「そうですね～」

私「でも、頑張ってくださいね！！　では！」

販売員「はい、ありがとうございました。また、お願いします！！」

と会話しました。最後まで、販売員の方は笑顔を絶やさなかった。（三回生）

私は三宮でビッグ・イシューを購入しました。初めて買いに行ったので、売っている場所も分からず、買うのにも困難でした。まず、駅の近くで売っているだろうと思い、駅員に聞いたのですが、「ん？　ビッグ・イシュー？」という感じで、ビッグ・イシューの存在すら知りませんでした。ちなみに、25歳くらいの女性でした。なので、交番に行くと、ダイエー前にいると教えてくれました。そしてダイエー前で発見しました。三宮で売っている人は静かな人で、本を持ち上げているだけでした。50歳くらいの男性でした。なんせ初めてなので、怖る怖る近づいて話しかけました。「ください」と。「ありがとうございます。200円になります」と答が返ってきました。先生からは会話をしろとの命令だったので、お金の用意をしながら喋り掛けました。

私「売れていますか？」

ホームレス「全然売れませんね。学校の宿題ですか？」

私「そうなんですよ。うちの先生が24号の8ページ読んでこいって」

ホ「8ページ？　なにが書いてあったかな……」

私「じゃ200円」

ホ「はい、ちょうどですね。ありがとうございます。また買ってくださいね！」

私「はい。またぜひ！　いつも、ここにいますか？」

ホ「はい、いますよ。ありがとうございます。」

私「はい、どうも」

という会話でした。その日はとても暑い日だったのですが、喋りかけてみるととても元気なおじさんで、いい人そうでした。でも、あまり会話が弾まなかったのも、次は笑いを取る程度に会話したいです。

(三回生)

昔なら、ビッグ・イシューを買うことに抵抗がありました。それは、何なのかよく分からない本を、よく分からない人が販売していたからです。保険論で話を聞くまでだったら、宗教系の雑誌にしか見えませんでした。しかし、授業で中身を知ることでその不信感はなくなりました。私達には大きな先入観があり、ホームレスの人達が売っているだけで不信感を持つのです。しかし、この授業で少しずつその不信感はなくなっていきました。そして、実際にビッグ・イシューを買ってみて思ったんですが、けっこう気さくな方で非常に買いやすかったし、何より、その人達の人間性を疑ってた自分が恥ずかしくなりました。

(四回生)

先週末、梅田のほうへ出ることがあったのでビッグ・イシューを買いました。僕はこの雑誌のことをテレビで取り上げられていたのを見て知っていました。しかし、当時は街角で見かけてもただこんな雑誌があるということを知っているだけで、買う気にはなりません。今回はとりあえず、先生が言っていた24号を買ってみました。雑誌を買うとき、軽く挨拶と一言「がんばってください」と声をかけました。相手の男性は笑顔で答えてくれました。今回は自分の意志でこの雑誌を買ってないので今度は自分の意志で買ってみようと思います。

(四回生)

僕は、梅田の東通り商店街にビッグ・イシューを買いに行きました。道端で絵を売っている人、手相を見ている人などの横に、ビッグ・イシューを販売している人がいました。僕が「26号ください」と言うと、その人は持っていたカバンの中を探し始めました。その時に間が一瞬あったので、「学校の授業で使うんですよ」と言うと、「そうなんですか。頑張ってください」と言ってくれました。最後に「また買いに来ます！頑張ってください！」と言うと、「ありがとう」と明るい声で言ってくれました。二、三言しか会話してないけど、何となく優しい人であるような気がしました。

(三回生)

私は、大阪駅を出て阪急の駅に向かう歩道橋のところでビッグ・イシューを買った。一人で買いに行ったので、家を出る時には正直不安だった。ホームレスというと、怖いというイメージがあったので、雑誌を買う時に何かしゃべって来なさいという宿題は、すごく嫌だった。

JRを降りて、どこにいるか見回してみると、歩道橋の下で立っていた。驚いたことに、女性だった。その女性は街で歩いているおばちゃんと変わりなかった。本当にホームレスなのかなあ？でも、女の人だったら声をかけやすくてよかった。そう思いなが

らその女性に近づいた。その女性とは、このようなやりとりをした。

私「24日から置いてありますか？」

販売員「ありますよ。土曜日はよく売れるから、全部揃えてあります。」

私「そうですか。じゃあ、24から27までください。」

販「ありがとうございます。最近、学生さんがよく買っていつてくれるんですよ。大学のゼミなんかで、使ってくれてるらしいです。」

私「ああ、それ、うちのゼミかもしれないです。」

販「もしかして、おっきくて、白髪の先生？」

私「ああ、たぶん、そうです。」

販「じゃあ、じっくり時間かけて読んでね。ぱっと見てるだけではおもしろくないから、1ページ、1ページ、ゆっくり。」

私「わかりました。ありがとうございました。」

女性が袋に雑誌をつめる間しか話していないので、とても短い会話だったが、とても明るくて元気の良い女性だった。あの人は本当にホームレスなのかよく分からないが、これからビッグ・イシューを買う時はこわいという気持はなくなりそうだ。(三回生)

先日、ビッグ・イシューを買ってみた。阪急梅田駅からJR大阪駅に向かう歩道橋で、首から看板のようなものを下げて売っておられた。「一つ、ください」「はい。ありがと」という極く短い会話ではあったが、初めてホームレスの人と会話をした瞬間であった。雑誌の内容も意外と充実しており、今後も気が向いた時には購入したい。(三回生)

僕は三宮でビッグイシューを購入しました。初めて買いに行ったのでなかなか売っている場所が分からず、歩き回っているとダイエーの前で売っている人を発見しました。三宮で売っている人は、本のことをアピールせずに、ただ本を持ち上げている人でした。近づいて、「ビッグイシュー、ください」と言うと、「ありがとうございます。200円になります」と答が返ってきました。その日は時間がなくてあまり会話をしませんでした、とても元気な人で、大変愛想もよかった。今度買う時は何も予定がない時に行き、たくさん話をしてみたいと思いました。(四回生)

5. ビッグ・イシューを買うのを楽しむ学生たち

ホームレスへの偏見がなくなって『ビッグ・イシュー』を買うことにそれほど抵抗がなくなると、購入するにあたっていささか余裕が生まれて、周りも見えてきて考えるようになる。そんな学生たちの姿がレポートから垣間見える――、

1回目買ったときは土曜日だった。梅田で市バスを降りてすぐ近く、JRとヨドバシカメラの間の所だったが、そこにはビッグ・イシューの入ったカバンが空けられて置いてあるだけで人はいなかったの、JRと阪急の間に行った。JR側で年輩の男の人

が売っていた。僕が買おうとする前に、50代くらいのおばさんと20代前くらいの学生が働いているのかわからないぐらいの女の人も買って行った。僕が「1つください」と言うと、おじさんは「最新号です。ありがとうございます」と、すごく丁寧だった。販売員と話せと言われていたので、「売れてますか？」と聞いた。おじさんは「今日はよく売れてます」と言っていた。「がんばってください」と言うと、「はい、ありがとうございます」と言われて、帰ろうとすると、「ありがとうございます」とまた言われて本当に頭も低く下げられたので、こっちの方が恐縮した。阪急の方に渡ると、歩道橋の階段から大きな声で目立つように売っている。僕が買った人よりも若い人だった。

2回目は連休の最後の日の日曜日だった。夜の7時くらいだったのでもう終わっているかと思ったが、ヨドバシカメラとJRの間で40代くらいの女の人が売っていた。このときも僕の前で20代半ばくらいの男性が買っていた。この時はもう会話しなくていいと思っていたので、「一つください」と言って、売り手の人が「ありがとうございます。200円です」と言って、200円渡して、「ありがとうございました。またお願いします」と言われたので、「がんばってください」と言った。こっちの人も丁寧だった。帰りにJRと阪急の間を見ていると、どちらの側もいなかった。(二回生)

初めて24号、26号を買いに行ったときは、正直ほとんど会話はしませんでした。販売員の人は「大学の授業で使うんですか？ 24号、26号は売れ行きがイイですよ」と言っていました。買って帰るときに、「ありがとうございました！！」と、すごい愛想のイイ感じでした。

2回目、27号、28号を買ったときは、初めは、少し話しかけづらいなあという印象があったけど、「売れてますかあ？」って聞いたら、「まあまあです。学生さんがよく買っていきます」と言っていたので、僕らのゼミ生が買いにきとんやろなあって思いました。僕たちにとってはたったの200円だけど、あの人たちにとっては、その日、ごはんが食べれるかどうかがかかってくることなので、200円の違いを感じました。(三回生)

街中で『ビッグ・イシュー』を売っている人を見かけたら¹⁾、買ってあげよう。そして、買うときには、ただお金を渡して本をもらうということではなく、一声かけよう。あの人たちは一日中立ちっぱなしで売っているのである。一声かけることによって、その疲れはだいぶ楽になるものである。僕も以前コンビニで深夜働いていたが、お客さんはお金を払って物を受け取るというのは当たり前行為である。当たり前だから、つい感謝など忘れてしまう。しかし、ある時、お客さんに「ありがとう」と言われた時は、本人は何げなく言っただけかもしれないが、その一言で僕はとてもうれしくなったのを

1) ここは、自分で「ビッグ・イシューを売っている所へ出掛けて」と読んでほしい。また、その直後にある「買ってあげよう」というのは、これまでの自分をなんら問題とせずもっぱら高見からものを言うスタイルであり、これでは折角の『ビッグ・イシュー』購入も自分の中の偏見を再考するきっかけにはならない。ここは「ビッグ・イシューを買おう！」と読んでほしい。

覚えている。感謝の言葉。それは、たとえ深い意味はないにしても、その一言があるかないかで大きく違う。人は言葉で相手に意志を伝える。だからこそ、一言がとても大事になってくるということを、その時実感し、僕はそれ以来お店などでは、ありがとうを言うようにしている。

(一回生)

今回『ビッグ・イシュー』を買いに行った時、朝に4冊、夕方に4冊購入した。◇◇君の友達にも頼まれそれだけの数になったのだが、朝購入した方はバックナンバーであったために手元になく、販売者のおっちゃん是在庫を取りにどこかへ取りに走った。戻ってきたら在庫はなく3冊しか揃わなかった。そこで、「どうしても4冊要りますか」と聞かれて、「はい」と答えると、「もう少し待って下さい」と言われ、再び走って行った。たぶん、というかほぼ確実に大阪駅周辺で販売している仲間の所へ走っていったのだと思う。戻ってきた時はかなり息があがっていた。けっこう急いでくれたのだと思う(感謝)。その後は、授業も控えていたので早く行かなければならなかったもので、軽くお礼を言って学校へ向かった。その日のゼミで、最新号も買っておけと言われたのでその日の帰りに買いに行った(再び◇◇君たちに頼まれた)。帰りに寄った時の販売はおばちゃんがおこなっていた。「最新のやつ、4冊ちょうだい」と言うと、「えっ、4冊も！？神サマや～」と言われた。こんなことを言ってもよいのか分からないが、リアクションといい愛想といい、おばちゃんの方がノリが良く、会話も軽くはずんだ。その場には、大学で先生が付けるようになったネームプレートを下げた人が一緒にいて、その人とも交ざって話をした。その人が何者なのかは聞かなかったので分からなかったが、その人いわく、ビッグ・イシューを大学の教材に使っているところはけっこうあるらしい。けっこうおもしろいおばちゃんだったので、次回に購入することがあれば、おばちゃんの方を選ぼうと思う。

(三回生)

初めて買ったのは、京橋でした。本当は京橋で買うつもりではなかったのですが、たまたま通りかかったので、そこで買いました。声が小さくぎこちない様子で売っていたその人に近づき、「一冊ください」と言うと、驚いていました。そして自分が、「いつもここで売っているんですか？」と聞くと、「今日が初めてなんです」と言っていました。何となく行動を見ていたら、納得できました。お釣りをもらって、「頑張ってくださいね」と言うと、「ありがとうございます」と笑顔で答えてくれました。嬉しかったです。これからうまい具合に仕事に復帰してもらえたらと思います。

次は、大阪で買いました。そこはよく母親も買う人のところでした。その人は、売り始めの当時は、あまり売るのがなかったのか、元気がなかったそうです。でも、徐々に月日が経ち、売り続けていると、だんだん売る姿勢が変わってきたらしいです。よく母はその人から買い、よく通るので、その変化を見ていたようです。今では、通る人にお辞儀をして、「お早うございます」「行ってらっしゃい」と声をかけているらしいです。実際、自分が行った時もしていました。

人に働く意欲を取り戻させたビッグ・イシューに、すばらしさを感じました。一人でも社会に戻れるなら、それはすばらしいことだと思います。(二回生)

僕は、梅田の歩道橋の上、阪神百貨店側に立っていたおっちゃんからビッグ・イシューを買いました。阪神百貨店でバイトがある日だったので歩道橋を歩いていると、ちょうどビッグ・イシューを売っているおっちゃんが立っていたので、24号と26号ありますか〜？ と聞くと、愛想よく、どっちもありますよと言われて買いました。最近コンビニとか入ってもけっこう無愛想な店員だったり、いかにもマニュアル通りです！ っていう感じの対応をするお店とかが多いなかで、ビッグ・イシューを売ってくれたおっちゃんは、買ってくれてありがとう、というような気持ちがこもっているような対応してくれましたので、買った側もなかなか気持ちいい感じでした。(三回生)

先生にビッグ・イシューを買いに行けと言われたので、梅田のJR大阪駅まで買いに行った。おばちゃんが売っていて、そこで買った。そんで、「毎日ここで売っているんですか？」など、その日は雨が降っていたので、「雨の中ご苦労様です」など、他愛もない会話を少しした。ただ、僕が一番印象に残っているのは、僕が買ったときの売っている人の表情だ。買った瞬間、「ありがとうございます」と言われた。売っている人がその収入を頼りに生活しているというのは授業で習ったけど、あんな感謝されるとは思わなかった。なんとしてでも売りたいという気持ちがひしひしと伝わってきた。僕はそのとき何とも言えない気持ちになった。(三回生)

僕は地元が京都なので四条河原町の阪急ビルの前で購入しました。まず私の一番初めの購入前のイメージは、普通にいるホームレスの方が拾い集めた週刊誌やらが一緒に並べてある中にあるのだと思っていました。ですが、実際はそうではなく、今までの何週間分をきれいに並べてクリアファイルにきちんと入れられていました。身なりのほうもイメージとは全く異なり、サラリーマンのようなガチガチのスーツではありませんでしたが、スーツを着てネクタイを締めていました。そして、購入しようと声をかけました。そうすると、販売スタッフさんは、男性にこれが人気だ、女性にはこれが人気だと細かく説明してくれました。なぜか男性に人気のあるのは表紙がハリウッドスターのイケ面の人たちばかりでした(レオナルド＝デカプリオやらキアヌ＝リーブス etc.)。そして、どんな人が買っていくのかと言うと、いろいろな人が買っていくが、若い人も多いと言っていました。時間はどれぐらいがよく売れるのですかと聞くと、朝の八時半から九時が最もよく売れると言っていました。それ以降は客足はぱったり止まると言っていました。そして、仕事があったので長いことは話せませんでしたが、帰りしなには普通の店の人と同じように、またお願いします、ありがとうございます、と頭を下げて見送ってくれました。感想は、まずはやはりイメージとは全然異なったことですかね。あと、本の内容を詳しく説明し販売してくれました。販売スタッフさんも気分よく対応してく

れていい感じでした。

(三回生)

先日、初めてビッグ・イシューを買いました。京都の四条河原町に平日の14時頃行くと、年齢はおそらく60代だろうおじさんが売っておられました。四条に行く前に、私はまず、家から近い京都駅周辺へ行きました。日曜などはよく京都タワー・駅ビル周辺で販売されているので行ってみたのですが、平日はおれないのか見つけれなかったのか、見かけなく、四条は確実だろうと思い、その後は四条へ行きました。案の定、いつもの所（四条河原町北西角）におられ、「一つ、ください」と声をかけました。そのおじさんに「やっと見つけた～。いま、京都駅へ行ってんけど、平日には販売してはらへんねんね～」など、いくつか会話をしました。そのおじさんは、笑顔で、まるで顔見知りのように、フレンドリーにしゃべってくれました。おじさんは、帰りに、「ビッグ・イシュー、みんなに広めてや!」と笑顔で言って、私は、「ありがとう。わかった!」と、その場を去りました。私が今まで抱いていたホームレスのイメージをそのおじさんは軽く打ち破ってくれました。雑誌自体も、思ったよりおもしろく、おじさんもおもしろかったので、見つけたら声をかけてしゃべろうと思いました。(三回生)

今日は5月29日です。たった今、ビッグ・イシューをゲット。ミニインタビューを遂行いたしました。本当は昨日購入するつもりだったのですが、スタッフ（ビッグ・イシューの販売員の方）がおられなかったため、本日になりました。以下に彼（五十代後半?の比較的エネルギッシュな覇気のある方・男性）とのやりとりを記載します。

私：「きのうおらんかったやん？」

彼：「すみません。きのうは体調悪くて疲れてたので……」

私：「何時頃まで立ってる（販売してる）のん？」

彼：「大体、朝八時から四時頃までかなあ……」

私：「これから（日差しが強くて）大変やねエ」

彼：「そう、真夏は一番キツイ……」

私：「どんな年齢層の人が買って行くのん？」

彼：「最近はやい女性が増えてきた……。男性は五十代の方が多い。」

私：「へえー、意外やねえ。内容からして若い男性が多いと思とった……」

彼：「男性の場合、ウチ（JR元町駅）では先生とかがよく買ってくれますよ。」

私：「そう、実は私も大学の講義で教わって、こうしてインタビューしてるねん。」

彼：「……」（無言で私の顔＝歳? をジーと見ていた²⁾）

私：「どれくらい（日に）売れる？」

彼：「新しい号が出た直後の日は百部前後、今日みたいな日（新号の直前）は三十部いくかいけへんぐらいです。」

2) これを書いた受講生は四十歳代後半の社会人である。

私：「テリトリー（販売地）あるのん？」

彼：「あるよ。ココはボクだけしか販売でけへん。ボクの許可がないとあかん……。」

私：「仕事、楽しい？」

彼：「そりゃ、やっぱりシンドイよ。けど、これ（ビッグ・イシュー）が出版されてホンマに助かってる。大きな収入源やと思うよ。」

私：「そやろなあ……いや、朝から販売の邪魔してすみません。がんばってください。」

彼：「ありがとう。元気が出ました。」

ざっと、こんな感じでした。ミニミニインタビューの短い時間の間にも、大勢の人が目の前を通り過ぎていき、業務の邪魔になっては……と思いながらも、ほどよく日焼けした顔が印象的で、ついつい長話してしまいました。（社会人受講生）

最近、阪急梅田駅とエストの所の横断歩道の所でビッグ・イシューを持ったおじさんがいたので「最新号ください」と声をかけたら、「ありがとうございます」と、とても丁寧な対応だった。その日はとても蒸し暑かったので、何げなく、「今日は本当に暑いですねー。熱射病に気をつけてくださいねー」と言ったら、「わざわざ気遣ってくださってありがとうございます。また買いに来てくださいねー」と、他愛もないやり取りだったが、とても好感が持てた。少し失礼なのかもしれないが、なぜああゆう人がちゃんとした仕事に就けないのか、疑問に思う。まじめで気さくで、なによりとても人の痛みがわかる人なのに……。（四回生）

ビッグ・イシューを買いに、梅田まで行ってきた。その日は暑く、外に出るのが嫌なくらいだった。買った場所は、阪急とJRを繋ぐ歩道橋を渡ったJR側の所だった。販売している人はおばさんで、「一冊ください」と言うと、「二百円になります！！」と元気に返してくれた。「今日はどうですか？」と尋ねると、「あまり良くない」とのことだった。ビッグ・イシューのことは授業で聞くまで知らなかったの、「初めてこの前ビッグ・イシューのこと聞いて、それで買おうと思ったんですよ！」と言うと、もっとみんなに知ってほしいけど宣伝がなかなかできなくて知らない人が多いって言っていた。良いこと書いてあるからもっとたくさんの人に読んでもらいたい、とも言っていた。私は、今回のことでビッグ・イシューのことを知ったのでまだ知らない人に教えてみようと思う。「ありがとうございます！！」あんなに大きい声で、あんな人込みの中で言われたのは初めてで照れ臭かった。（四回生）

町中で変なオッサンが本を売っているのは知っていた。大阪に引っ越してきてから、彼らを見た時は何をやっているんだろうと不思議に感じたものだ。とりわけ、服装から察するに裕福ではなさそうだ。まさか、自分が買うとは思ってもみなかった。彼らは一日中そこに立ち、本を売っている。おかしい話だ。わざわざ路上で売らなくてもいいのに、と思ってしまう。通り過ぎていく人々の視線も様々だろう。最初どのような内容の

本なのかは全く想像がつかなかったが、本を買ってみて、意外なことに我々一般の若者でも興味をそそるものがたくさんあることに驚いた。まだ詳しく読んでいないので具体的には言えないが、世の中を賑わせている有名な情報が分かりやすく載せられている。表紙にも有名な俳優やアーティストを載せることでイメージアップと買いやすさを感じさせてくれる。世の中の人たちへの問いかけ的な表現の使い方もうまい。ページ数は少ないが、フルカラーで様々な情報がつまった雑誌で二百円は手頃な値段だろう。ちなみに、私は毎週『ザ・テレビジョン』を買っているが、全く関係ありません。もちろん、近くの「本屋」ですけど。

話は変わるが、彼らの仕事はとても楽なものではないだろう。一日中立ってるだけと言われればそれだけだが、毎日である。私は一回生の時のバイトで7～8時間立ちっぱなしで仕事をしていたが、楽ではない。彼らも歴とした仕事をこなしているのである。そここのところを評価して欲しい。確かに世の中に楽な仕事はさほどないだろう。所得格差が予想以上の広がりを見せ、連日新聞や雑誌を賑わせているなか、仕事に対する思いは様々だ。大学生としていい企業に入り、高い給料をもらいたいと考えるのは、自然なことである。しかし、仕事の種類やその働きに対する対価は人それぞれ。大企業に勤めているからといって、素晴らしい仕事をしているとは限らない。清掃人がいなければ会社のトイレはきれいにならないように、会社を支えているのは全体であり、一部ではない。世の中を支えているのは、内閣総理大臣ではなく、国民だ。そして、ビッグ・イシューを売っているホームレスも国民で、彼らは本を売るという「仕事」をしている。彼らも働いているのである。こここのところでは彼らを実評価してもいいのではないかと私は考える。冷たい視線を送る間に、まずは接することが大切だ。それでも偏見をもってしまえば仕方がない。人は様々な感情をもった生き物なのだから、誰が良くて誰が悪いのかを決めるのは、人それぞれなのだから。

購入時の会話について

私「一冊下さい。」

相手「はい。」

私「バックナンバーありますか。前回の分と一緒に大学のゼミの授業で使うんですよ」

相手「ありますよ。これですね。」

私「そうです。はい四百円ちょうどで。」

相手「どうも。」

以上。私も急いでいたので、込み入った会話はしなかった。相手もそれを察していただろう（笑）

（二回生）

僕は梅田のJRの駅の近くの横断歩道でビッグ・イシューを買いました。正直、通行人が多かったので、買うのに少し戸惑いました。一人で行っていたので余計にそう思ったのかもしれませんが、でも、いざ買ってみると、それほど周りの目は気になりませんでした。逆に、なんだか買うことが誇らしく思えてきたのです。

まず、「すいません、ビッグ・イシュー、一つください」と言ったら、売っている人はとても礼儀正しくて、被っていた帽子を脱ぎ深々と頭を下げて、「ありがとうございます」と言ってくれました。買った僕は、とても気持ちの良い気分で購入することができました。普通にお金を渡して本を渡されたのなら、もう二度と買うことはなかったでしょう。でも、あれだけ礼儀正しく接してくれるのなら、もう一度買ってみようという気分になりました。買った時、僕は用事があって少し急いでいたので、あまり話すことはできませんでした。こんどビッグ・イシューを買う時は、こないだ買った時よりも長めに話してみようと思います。

(二回生)

ビッグ・イシューのやりとりのことですが、池野さんからビッグ・イシューという雑誌を知った。その話を聞いて、絶対購入しようと、何故か思ってしまった。今では1日と15日には毎回ぐらいにまで、常連になってしまった。僕は梅田で買わしてもらっているんだけど、女性の方から買っている。正直、悪いけれど、本当にホームレス？ っと思うぐらい外見のいいおばちゃんだけれど、この人も生活に苦しんでいるのかって思うと、僕なんかご飯も不自由なく食べているし好きなこともできるから、まだマシだなあって思った。その反面、少しでも俺の力が助けになるなら買いたいって思ったのも事実。もう、その人の名前も覚えているし、その女性も俺の名前まではいかないが、顔も覚えてもらっているから嬉しい。一番最初の女性の雰囲気が良かったから、こんな毎回のように買っているのかもしれない。他の人から買っていたら、今の自分はないかもって思う。そのお陰で俺のガールフレンドもたまに買ってくれているし、友達も買ったよって言うてくれたから、嬉しかった。親にも電話して、ビッグ・イシューのことを教えた。今度、戻った時に持って帰ってやろうと思った。ビッグ・イシューを売っている人達はホームレスだけど、雑誌の終わりのページぐらいに販売者の紹介みたいなのが記載されているのだが、ちゃんと昔は働いていたとか、家族を持っていたとか、一般の人となんら変わっていないのだが、今はお金がないのに困っているのだと思う。でも、お金を持っているホームレスじゃない人と、お金は持っていないホームレスとは、大きな違いかもしれないけれど、ホームレスの人はホームレスの人で陰ながら努力をされていて、ちゃんと前を向こうとしている人も中にはいるから、ホームレスを正直変な目で見ていた自分が追っ払えて良かった気もする。

(三回生)

この前、京都の河原町に行った時ビッグ・イシューを売っているのを見ました。初め見たとき驚きました。関西では大阪だけと思い込んでいたからです。そして、もうひとつ驚いたことがあります。その人は、大きな声を張り上げてビッグ・イシューを売っていました。これまでに何人かのビッグ・イシューを売っている人を見てきましたが、あれほどまでに声を出している人はいませんでした。あのような人に頑張ってもらいたいです。これまでに、何回かビッグ・イシューを購入し、それを学校に持ってきていると、友達が興味を持ち始めました。自分もそうでしたが、まずビッグ・イシューの存在を知

らない人が多い。一見何も知らない人が見ればただの薄い雑誌にしか見えません。何も知らない人にビッグ・イシューの存在を教えると驚いています。(二回生)

ビッグイシューを買った時の反応は本当に嬉しそうでした。一冊売ればその日の生活ができるので、本当に感謝していました。先生がビッグイシューのことを取り上げなければ、まず買っていなかったと思います。ビッグイシューを販売している人の売れた時の笑顔を見ると、少しは自分も貢献できているのかなと思いました。(三回生)

最初、前に見た元町の販売員さんを探したんやけど、見つからず、三宮まで大回りで頑張って探した。この三宮の販売員さんは結構気合の入った人で、ドトールと信長書店の間らへんのとこでかなり大きい声を出して、「よろしくお願いします！」って売っていた。前に元町の販売員さんを見たときはあんまり元気がなさそうな感じがしていたから、ちょっとびっくりな感じでした。だいたい前に『バンキシャ』かなんか忘れたけどもビッグ・イシューのカリスマ販売員さんの特集やってるの見て、その人といっしょぐらいなセールスのアピールやった。

「すんませ〜ん」って声をかけたら、大きい声で「はい！」って答えてくれて、このとき、24号と25号のどっちやったかなあ、と思ったから、「バックナンバーなんですけども、24号と25号ありますか？」って聞いた。ここでもハキハキした感じで「はい！ ありますよ〜 24号と25号ですね！」って答えてくれた。そこで、「今週ね、大学のゼミでこの号を使って勉強するんですよ〜」って言ったら、「ほんまですかあ！」、で終わった。ここは、ちょっと予想外。自分の予想ではもうちょっと乗ってきてくれるかなあと思ったけども、そこで会話が途切れる。

商品を渡してくれたときに、「どこの学生さんですか？」って聞かれて、「大阪経済大学です」って答えた。ひょっとしたら池野先生と知り合いなんかなあ、と思って次の答を期待してたけども、「あ！ そうですかあ！」と返ってきたので、ああ、知り合いじゃないんか、と心の中で思った。お金払って、「おっちゃん、ありがとう」って言うて、「ありがとうございます！ 今後ともぜひよろしくお願いします！」って言われて、「はい！ じゃあ頑張ってくださいね！」と言って別れた。駅のほうに戻ってる間も、ずっと聞こえるぐらいの大きさの元気のいい声で売ってはった。

ちょっと自分の想像してた販売員さんと違って、めちゃくちゃ元気のある人で、びっくりした、ってのが感想です。あと、もうちょい会話が續くかなあと思ってたんですが、ちょっと続かなくて、なんか話題を作ったほうがよかったかなあと思ったりもしました。次号買いに行ったときには話してみようと思います。(三回生)

僕は、ビッグ・イシューをいつも梅田の歩道橋の上の阪神百貨店側のところで買います。買う時は一言、二言話す程度なんですけど、この前27号を買いに行ったら、「いつもありがとうございます」って言われたので、顔を覚えてもらたんかなと思いました。あ

あいう、人と接することは普段あまりないので、顔を覚えてもらったっていうのは、買う側としてもなかなかうれしかったと思います。(三回生)

ビッグ・イシューが発売して半年くらいは毎回買っていた。読まなくなったのは、単純に飽きてしまったから。読まなくなってからもしばらくは買っていた。けれど、自分が読みたいと思わないものを買うことって、ちょっと変だなんて思い始めた。それから足が遠のいて全然買っていない。先生が熱心に勧めているのを聞いて、また買ってみようかなと思った。最近知ることが大事だってわかってきたし、ビッグ・イシューはそういった事実も毎回記事にしていたと思うから。(三回生)

6. 「ビッグ・イシュー購入記」レポート配布の後に

こうした学生たちのレポートを私がワープロに打ち込んで整理したものに、大阪梅田周辺の「ビッグ・イシュー」販売員たちが作って配布している、自分たちの似顔絵入りの「通信」(正式名は『ビッグイシュー梅田通信 ちょっとひと休み』vol.1)を添付して、講義とゼミで学生たちに配布した。

こうした作業を私がやるのは、レポートを出してくれた学生には個別に返却しているものの、他のレポートには関心があるだろうし、自分のレポートと比較して得るところがあれば吸収してほしいからである。配布後に、年輩の保険論受講生から、「皆さん結構まじめに書かれているように思います。また、これをまとめられた先生も大変な作業をされたことと思いました。私には大学生活の思い出の資料がひとつ増えました。大事にしたいと思っています。保険論を受けられた生徒さん達には、決して今の若い子は……などとは言えません」(四回生)と感想をもらった。

この配布後に、ビッグ・イシューがどこで売っているのか分かったから買えるようになったという学生や、みんなの「ビッグ・イシュー」購入記レポートが面白かったので自分も買ってみたくなったという学生が現われて、新たにレポートが出された――、

阪急を出た歩道橋の所で、ビッグイシューを買いました。会話はあまりしませんでしたけど、がんばってくださいと言うと、とても喜んでくれました。この日はとても暑く、立っているだけでも汗が出る日でした。こんな日でも笑顔で元気よくビッグイシューを売っている姿を見ると、200円で本が買えるならもっと貢献できたらいいなと思い、今度また機会があればビッグイシューを買っていきたいと思いました。

先週、配られたみんなのビッグイシュー購入のレポートをまとめたプリントを読んでいたら、すごい長い会話していた人もおり、驚きました。また、なかなか販売員が見つからないという人もたくさんいました。僕の場合は、けっこうバイトとかでほぼ毎日梅田に行っていたので、あの人かなというのは分かっており、すぐに見つけることができました。あと、共感できる感想もあり、いろいろ勉強になりました。(三回生)

THE BIG ISSUE が創刊されて間もない頃、たしか関西ローカルの夕方のニュース番組で、THE BIG ISSUE の特集をやっていました。ホームレスの人が¥90でこの雑誌を買って路上で¥200で売るという説明をしていて、正直私は、「ホームレスの人が売ってるもんなんか買う人がおるのかなあ、ってゆうか、200円って高いやん」そう思っていました。しかし、その4～5日後、驚いたことに、母親がTHE BIG ISSUE を購入していました。たしか6号ぐらいだったと思います。もう1年以上も前のことなので冊子の中身も覚えていませんが……。そしてその後、自分のお金でTHE BIG ISSUE を買うとは思いませんでした。池野先生のおかげかもしれません。保険論の授業でTHE BIG ISSUE のことを改めて知り、佐野さんのお話をうかがって（購入したのは佐野さんが来られる前でしたが）、私の中の「ホームレスが売る THE BIG ISSUE」という概念が「路上販売員が売る THE BIG ISSUE」へと変わりました。

さて、私が購入したのは26号です。J R 大阪駅御堂筋口の横断歩道で、同じく保険論を受講している友人と行きました。販売員さんは優しい人でしたが、二人とも初めての体験で、どう会話をすればよいのかわからず、私「26号ください」／販売員「はい、200円です」／私「はい、ありがとうございます」／販売員「どうもありがとうございます」というような普通のやりとりになってしまったことを後悔しています。人通りも多い所だったので、会話がしにくかったというのがありますが……。次回購入する時はこれ以上絶対しゃべるぞ、と思いました。またしても驚いたのが、すでに家に26号があったことです。母は不定期購入者で、半年に一度くらいしか買っていなかったのに、タイミングが合ってしまいました。さすが親子です。

この講義を取って、レポートを出したのは数回しかありません……。ほんとにすみません。でも、先生の講義はとても楽しかったです。あまりレポートを出していないのに、返却してもらうとき、「久しぶりやん」と声をかけていただいて、少しでも「覚えてくれてはるのかな？」と嬉しくなりました。もっと出していたらよかったと今更ですが、思います。秋学期の保険論Ⅱも時間が合えば取ろうと思っていますので、またどうぞ指導下さい。（三回生）

「ビッグイシュー購入記」を授業でもらい、家で読んでみました。どの学生も、「ホームレス」の方について同じ印象を抱いているようでした。

最近、『ビッグイシュー』のホームページを初めて見ました。『ビッグイシュー』を売るということは「ホームレス」の人々を助けるためだと私は思っていたのですが、ホームページには「救済ではなく彼らの仕事をつくることにある」というフレーズを読み、僕は勘違いをしていたのだと知らされました。『ビッグイシュー』についての単行本〔後掲〕が発行されたと知り、読んでみたいと興味を持ちました。（三回生）

ビッグイシューの方が講演に来るのに一回も読んだことがないと失礼になると思い、先週ようやく買いに行きました。授業中に配られた販売員マップを見て、J R 大阪駅の

高架のところを選びました。やはり怖かったので、最初は女の人のところがいいと思ったからです。他の学生の購入記録を読んで、そこに男の人がいる時もあるというのを見、買いに行くまではすごく不安でした。実際行ってみると女の人で、なんとか勇気を出し、購入しました。私は500円しか持っていなかったのですが、最新号の他に、就職のことが特集されているバックナンバーも購入しました。その時その特集の号のナンバーがあやふやだったので、「たぶん26号で就職の特集が組まれているのが欲しいんですけど……」と言うと、親切に本当に載っているか確認してくれました。それから、「池野先生のことをご存じですか？」とたずねてみたところ、「名前は知らないけれど、大学で教えている人で、白髪で眼鏡をかけている人ですか？ その人はよく買ってくれて、授業でも宣伝してくれます」と、覚えているようでした。一度買いに行くと、また買おうと思わされます。

(四回生)

6. おつりの問題

前節最後の学生は手元に小銭が五百円玉しかなかったので二冊買っているが、通常一冊しか買わないので、ビッグイシュー購入の際のお釣りの問題が出る。新札発行時の偽一万円札問題があった時、ビッグイシューの販売員も被害に遇ったという(櫛田佳代『ビッグイシューと陽気なホームレスの復活戦』ビーケーシー発行 04年 pp. 140～143)。

あるゼミ生は手元に五千円札しかなくて、それで『ビッグ・イシュー』を一冊買おうとしたら、販売員がそれを受け取るや(荷物などをそこに置いて、とは彼の補足)「脱兎のごとく」(とは、彼の弁)両替に走った(彼には、両替に走ったとは分からない)。で、彼は、「えッ？ いったい僕の五千円札は？」と呆然とした、と語った。

小銭がないというレポートもある――、

私は大学へ通うのに梅田からバスを利用しています。梅田のバス停辺りにはいつもホームレスの方がよく通りにいました。それを横目に見ながらいつもバスに乗っているのですが、先日遅刻ギリギリの時間になってしまい、速足でいつも通りバス停へ向かっていました。ビッグ・イシューのこともあり、道を歩いていてホームレスの方が気になるようにはなったのですが、どこで売っているのか全く分からず簡単に見つかるものではないと思っていました。

しかし、遅刻しそうになった日、何人かのホームレスの中に片腕を上げて何かを持って立っている人が遠くからバス停の方にいるのが目につき、もしかして……と思いました。バス停に近づいてその人の横を通り過ぎる時、あらためてよく見てみると、片手に持っていたのは厚紙に大きく「イシュー」と書いてあり、その下には「¥200」と書いてありました。そしてその人の横には、「ビッグ・イシュー」と大きく書いてその下にはバックナンバーの見本と思われる表紙がたくさん飾った看板のようなものが置いてありました。「ビッグ・イシュー」という文字を見て、やっと保険論の授業で言っていたものだと確信しました。その姿はまさに、池野先生が「こんなカッコして売っているか

らねー」と言って真似していた格好と全く同じで、とても分かりやすかったです。予想外にも早く出会ってしまって、遅刻しそうなこともあり、その場でさっと買うことは出来ませんでした。買う時は何か話をしてみたいとも思っていたし、なにより心の準備が必要でした。私の知るホームレスとは、とても自分から近づこうと思えないような人達ばかりだったからです。

こんな感じで初めてビッグ・イシューを売っている場に遭遇したわけですが、その後いろいろな疑問がわき出てきました。

バスに乗ってから財布を見ましたが、小銭入れには500円玉が一枚だけ入っていました。もちろん、この500円玉を出して200円のビッグイシューを買って300円のおつりをもらうことは出来ますが、ホームレスの人にとって300円のおつりを渡すということはどういうことなのか。私にはそれが引がかかってしまいました。「500円持っているのにおつりを取るのか!?!」「それぐらい恵んでくれないのか!?!」ホームレスの人にとっての300円というのは、私達にとっての300円の価値とは違うだろうし、300円あればビッグ・イシューを3冊買って、それをまた200円で売って、600円の収入になることもあるだろう。朝昼晩とおにぎり一個ずつ食べることも出来るだろう。そう考えると、財布に500円玉だけが入っていたらおつりはもらうべきではないのだろうか? と考えてしまいます。しかし、ホームレスの人も「おつりはいらない」と言われて同情されていると思うと、ひもじい思いになってしまうのではないか。200円きっちりと持っていたとしても、「こいつホームレスの人に対して気遣いというものはいいのか」など思うかもしれない。一般にはどうしているのでしょうか? 500円玉や1000円札で渡してもおつりはきっちりともらうものなのでしょうか? それとも、おつりはいらない、と言うのでしょうか? これが一つ目の疑問です。

二つ目の疑問³⁾は、なぜビッグ・イシューを売っているホームレスと、何もしていないホームレスがいるのか? 単に自立したいというやる気の問題だけなのでしょうか? ビッグ・イシューというのはホームレスの人の仕事をつくる為にあるようだが、ビッグ・イシューを売って働きたいという人がいても売ることが出来ない人もいるのか?

三つ目は、ビッグ・イシューの本を作るためのお金はどこから出ているのでしょうか? 90円でホームレスに売ってその売り上げで採算はあっているのか疑問です。(四回生)

先日、出勤時(五月二十二日)にビッグ・イシューを購入しようと元町駅東口に行ったところ、財布の中に一万円札(が壺枚)しかなくて買えませんでした。「まあ、ええわ、夕方また来よか……」と思い直し、勤務終了後(午後五時半頃)同地点に向向いたところ、販売員の方がおられず、結局手に入れる事ができませんでした。池野さんがおっしゃっていたように二～三質問をしてコミュニケーションをとりたいと思っていたの

3) 二つ目・三つ目の疑問は、ビッグ・イシュー日本代表の佐野章二さんの講演記録をまとめた別稿に譲る。

ですが……。申し訳ありません。来週の土曜日、又は日曜日に約束を遂行いたします。
(社会人受講生)

私は、五千円札を出した先のゼミ生から話を聞いたとき、手元に五千円札しかなかったのなら、友人たちへのプレゼント用にとかバックナンバーを買うとかして、とにかく少なくとも千円分を買うなどの配慮をするか、あるいは、近くの店とかで何かを買って小銭を作れ、それがルールや、と話した。

7. 『ビッグ・イシュー』を読んで考える学生たち

最後に、学生たちが『ビッグ・イシュー』を読んで何を学び、どんなことを考えているかを、同誌第24号——労働・就職などが特集されている——を例に紹介し本稿を終える。

僕は家（兵庫県）から通っているのですが、アルバイトで食費、交通費などを払うため、4月の時点で定期を買っていたので残金が60円でした。そして、給料が5月に入り、今月も来月切れる定期代の事を考えると、正直あまり余裕はなかったのですが、前々からビッグ・イシューは読んでみたいし、売っている人ともお話してみたいと思っていました。先生が、買うときはお話をしてみてくださいと言われて、僕も去年深夜のコンビニでアルバイトをしていて、本人は何とも思っていないのかもしれませんが、「ありがとう」とお客さんから一言言われると本当に嬉しい気持ちになったのを思い出して、先生に「お話してみてください」と言われるまでその気持ちを忘れかけていました。本当は一番大切なことをアルバイト中に学んだのに、本当に人というのは身近すぎて大切なことはいつの間にか忘れてしまうものだと思います（僕だけかもしれませんが……）。

話はそれてしまいましたが、そんな思いでビッグ・イシューを買いに行きました。梅田で女の人が売っていました。僕が「すみませ〜ん」と声を掛けると、元気よく「はい、どうも〜」と言ってくれました。そして、「前回のを下さい」と言うと、紙袋から前回のを取り出してくれました。で、その間に、「どうですか、今日は。売れていますか？」と聞くと、「はい、おかげさまで、今日はなぜか分からないけど調子良いんですよ〜。やっぱり天気もあるみたいです。こういうちょっと曇りで、過ごしにくくない日は売れたりするんですけど。私にもよく分かりませんわ〜（笑）」僕：「おお〜、いいですね〜。いや〜、最近売れ行きがよくなくなってるって聞いたんで〜」「ああ〜、そうなんですけどね〜、今日は、いいです〜」という感じの話をして、お金を渡して、「じゃ、頑張って下さい」と言って、買いました。とても感じも良くて話もしてくれるし、本当にビッグ・イシューに掲載されてる内容もちろん勉強になり、元気をもらえるのですが、それ以上に、最近あまりなくなってしまった、物を買うことを通しての、人との触れ合いの楽しさを勉強させてもらえる人でした。

今回ビッグ・イシューを買おうと思ったのにはもう一つ大きな理由があって、それは僕は前から将来したい職業はあまりはっきりしておらず、このままではいけないと思っ

て焦っていたのですが、たまたま前回のビッグ・イシューの特集が「捨てよ天職幻想」だったので、これはぜひ買いたいと思ったのが理由でした。そして、その特集から、僕は天職というものが確かにはっきり見つかる人もいるが、「天職だと思って仕事をしてそうな、ミュージシャンだって、お客さんから拍手をもらえるから楽しいのであって、むしろそれ以外はしんどい」という事や、「天職だと思って、強い期待を抱いてしまい、そのギャップから逆に嫌になってしまう人もいたり」という事や、「天職なんて見つけれられる人はほんのわずか。仕事をやっているうちに気づくものでもあるし、そこからまたやり直しても構わない」という事を読んで、ある程度自分の興味のあることを知る事は大切だけど、とことん突き詰めなくても仕事を通していつの間にか突き詰める事のできるものなのかもしれないという、少し余裕を持つ気持ちができました。今回このような事を学ぶことが出来て、本当にビッグ・イシューを買ってよかったと思いました。

(一回生)

先生がビッグイシューの最新号の中で農林漁業について書かれていると話されているのを聞いて、読んでみたくなった。その理由は、来年の就職活動についてあまり期待感とか楽観的な感情が持てなかったからだ。離職した人達の話などを聞いていると、自分が企業に就職して定年まで勤められるのか、と考えてしまう。だからといって、就職以外の道があるなんて、ちょっと考えつかない。農林漁業について興味はない。けれど、別の方向としてどんな生き方があるのか知りたくなったので、ビッグイシューを買うことに決めた。私がビッグイシューを買ったのは、梅田の大きな歩道橋下で売っている人からだ。腕をまっすぐ伸ばしている姿を見て、先生の話思い出した。販売員の方とはお話はしなかったけれど、雑誌を受け取る時に、ありがとう、とだけ言った。あの喧噪のなかで私の小さなありがとうが販売員の方に聞こえたのかは分からないけれど。販売員の方を見ていて思うのは、最初の頃に比べて着ているものが格段に良くなった、ということだ。ジャケットを着ている人なんかもいて、消費がこんなに明確な形で誰かの生活を変えているということに、驚いたりした。

農林漁業の特集を読んで感じたことは、この人達は生きるということに対して、なんて素直なんだろうということだ。他のことをしていても、体は農林漁業の方に向かう。その気持ちに従って、農林漁業を志す。普通に生活すること、食べていくこと、生きるということに満足を見出す。自然に向き合っていると、底のない消費欲求から解放されるのかもしれない。この三人の生き方を読んで感銘を受けたりはしなかった。ただ、生きることにダイレクトに向き合うこと、自然から得られる何かがあること、そういった姿勢は、巷に溢れている成功談よりはよっぽど心に響いた。

(三回生)

四月になりました。楽しい春休みも終わり、ついに学校が始まります。もう三回生です。大学生活の二年間はあっという間に過ぎてしまい、一回生・二回生の頃には全く何も考えずに通学に二時間もかけて、いつもしんどいなあって思いながら、とりあえず学

校に来ていた。僕が三回生になったというのもあって、卒業とか就職とかいろいろ考えるようになりました。まず、卒業についてなんですが（略）バイトを控え目にして、学校を中心に生活したいと思っています。

次に就職のことなんですが、「BIG ISSUE」24号を読んで僕の考えが少し変わりました。僕の中で自分の好きなことに関する職（天職）に就かないと楽しくないし直ぐに辞めたくてしまうのではないか、というような考えを持っていました。僕もいま、特にやりたい仕事がなく、今後の就職活動とか、自分がどうなるんだろうって悩んでいたところで、この特集記事を読んで、そこまで天職にこだわらなくてもいいんだと少し気が軽くなりました。最近の僕は、やりたい仕事を見つけ出すために無理矢理に好きなことを作り出そうとしていたような気がする。やりたい仕事に就いても理想としていた仕事ではなかったり、自分のやりたい仕事に就けなくても、その仕事にやり甲斐を感じれる場合も少なくない、と書いてあった。自分のしたい仕事じゃなくても、自分次第でやり甲斐のある仕事だと気づけるということが分かった。

（三回生）

〔本稿は04年度特別研究の成果の一部である〕